世嬉の一蔵物語
―酒の民俗文化博物館と酒蔵群―

酒の民族文化博物館　館長　佐藤　晄僖

世嬉の一酒の民俗文化博物館は、1986年（昭和61年）に、酒の仕込蔵（お酒を発酵させる場所）の土蔵を改装して開館しました。現在ある７棟の酒蔵の再開発事業の一環としての改装でした。

この蔵は、東北有数の大きさを誇る土蔵です。間口八間半（約15.5㍍）、奥行き27間（約49㍍）、高さ７間（約13㍍）の総二階建てです。

この蔵は、トラス組み・クイーンズポストと言われる西洋式の梁組を採用しているので、大きく作れたのです。

一般的な土蔵の梁組は、大きな太い木の曲がりを利用します。従って自然の木の大きさの制約を受けます。しかしトラス組みは、三角形全体で屋根の重量を支えるため、木材を繋いで大きく出来、梁の横幅や高さを大きく出来るのです。

館内には、往時の酒造りの道具が、製造工程順に展示されていますが、大きな釜や桶だけで無く、酒造りのほとんど全ての道具、例えば「麹蓋」、「櫂」のような酒造に直接使われる道具や、「ささら」のような掃除道具や「むしろ」など、通常は破棄されてしまうような用具まで揃っています。

その数は、約1,600点です。

この博物館は、以上の大きな土蔵自体の保存と伝統的な酒造りの用具類の保存を目的とした博物館なのです。

博物館の直接の入館者は、年間約16,000人とそう多くはありません。しかし、付属のレストランやお酒の直売所などを備えているので、それらの来場者を加えると年間約40,000人ほどの来場者となります。

写真１　博物館前景

（博物館の行事）１、歴史を食べる会

この博物館の特徴は、単に展示だけでなく、地域の伝統行事などの復活活動を地域の古老や郷土史研究家の助けを借りて手がけてきました。

最初に有名になったのは、「歴史を食べる会」でした。食文化史研究家の永山久夫先生の指導による「再現食と講演」の行事です。

卑弥呼の食の再現を皮切りに、聖徳太子、小野小町、春日局（当時NHK大河ドラマで放映されていた）、芭蕉に至る５回の歴史的な食の再現でした。

この年は、芭蕉の奥の細道の旅300周年の年でもありました。

（博物館の行事）２、田植え・稲刈り

幼稚園児による田植え、稲刈りもこの地方の季節の風物詩となりました。

一関の伝統的なもち食文化を子供達に継承しようと、平成３年、博物館前にミニ田んぼを作り、稲を植えました。

親しい友人から「食管法違反だぞ」（「食糧管理法」は平成７年廃止）などと冷やかされながらの出発でした。

そのうちに、近所の幼稚園児による田植えや稲刈り、餅つきのイベントとなって行きました。わずか５坪（約17㎡）ほどの小さな田んぼを取り囲み、園児やご父兄など数十人が田植えや稲刈りを楽しみます。

先生方も泥だらけになった園児のお世話に大忙しです。園児達は、作業の後のお餅が楽しみです。

５月頃には、園児たちが田んぼを取り囲み、緑に伸びた苗を見ながら「大きくなあれ、大きくなあれ…」と励ましています。

写真２　幼稚園児の田植えか稲刈り

（博物館の行事）３、伝統の門松の再現

江戸時代から伊達藩で広く飾られていた独特の門松があります。

当館の開館をきっかけに、今は廃れてしまったこの伝統の門松を再現したいとの郷土史研究家の要望もあって、その再現と伝承の行事を始めました。

この地方の伝統的な門松は、門の形をしています。枝が三層に重なった「三蓋の松」と言われる松の木を両側に建て、笹のついた竹を添わせます。松の木の上に横木を渡して門の形にします。

松や竹の足下は、割った短い栗の木を三方から斜めに当てて支え、縄で三段に縛って押さえます。縄は七五三となるよう下は七重に巻き、真ん中は五重、上の三段目は三重に巻いて縛ります。横に渡した横木にしめ縄を飾って出来上がりです。

この伝統門松建てについては、復活を始めた1991年（平成３年）頃は、その作り方を知る人が少なくなって、後継者の存続が危ぶまれていました。

しかし、毎年12月15日と日を定めて博物館前に飾っていただき、あわせて新酒のお披露目である酒林（さかばやし・杉の葉のくす玉）の飾り日として開催して来ました。

その活動の継続の結果、マスコミ各社が取材に訪れてくれるようになり、地域の暮れの風物詩として定着しました。

制作に携わる人も、今では厳美地区（一関市の西の地域）に「伝統門松伝承保存会」が出来て、10人近くの伝承者が活動しています。

更にこの門松は、元々は伊達藩全体に拡がっていたものであったことから、伊達藩の本拠地である仙台でも復活させようとの運動が起きました。当館からは資料を提供して、活動のお手伝いをしました。

今では仙台だけではなく、旧伊達藩の各地へと広がりを見せています。

写真３　門松建て新聞記事

（文学の蔵）

2010年（平成22年）からは、博物館の一画を使って、市民団体「一関・文学の蔵」が設置する「一関・文学の蔵」（入場無料）が開館しました。

わずか12坪（約40㎡）の「日本一小さな文学館」ですが、一関ゆかりの作家・俳人12人の著書や原稿などを展示しています。

行政の補助もなく会費と寄付金とで運営しているので、「市民立の文学館」を誇っています。

この建設には、多くの支援者の寄付と井上ひさしさんが「助っ人」（ご本人の言葉）として支援して下さったお陰がありました。

世嬉の一は、事務局としてお手伝いをしています。

市民団体「文学の蔵」の活動は、1989年（平成元年）に始まっています。

一関にゆかりの作家などを顕彰し「こころのまちおこし」を目指す運動です。

写真４　文学の蔵内部

（文学の蔵の名前の由来）

文学の蔵運動は、二つの運動が合流して生まれました。

当初、博物館の開館を機に、世嬉の一にゆかりの文学者の顕彰をしようとの動きが生まれました。

文学愛好家の方々の「藤村・ひさし記念館」構想です。世嬉の一の敷地内に島崎藤村の顕彰の看板を建てたり、「島崎藤村と一関」のパンフレットを作ったりしました。

一方、一関の都市計画のために取り壊されることになった三階建ての土蔵の復元運動もありました。この土蔵は、中心商店街の呉服店にあった建物でした。

三階建ての土蔵は、一関としては珍しいことと、商業華やかなりし頃のモニュメントとして再建しようとの構想が生まれました。

蛇足になりますが、当時の都市計画は（個人的感想からは）妙な計画でした。

大町通りと言われる街路の一区画の全ての建物が、一軒分づつ横に移動すると言う計画です。都市計画で道路拡張などによる個人の土地などの減歩は補償の対象にならないそうです。それで地域の人々の負担が皆平等になるようにするためとのことでした。

この計画で、多くの土蔵や、三階建ての土蔵のような珍しい建物や、大きな庭園、閑院の宮様の宿泊した建物など、後世に伝えたい建物などが数多く消えて行ったのです。

ともあれ、以上の二つの流れが自然に合体した結果、文学の蔵運動になったのでした。

「蔵」の名前がついたのは、音楽との対比からでした。

世嬉の一の近くに「ジャズ喫茶」として有名な「ベーシー」があります。この建物は、元々は醤油製造の土蔵を改築したものでした。土蔵は音響が良いのだそうです。

「ベーシーが音楽の蔵だから、こちらは文学の蔵にしよう」と決まったのでした。

（世嬉の一と島崎藤村）

前述のように、文学の蔵運動は、世嬉の一に滞在した文学者の顕彰運動と三階建て土蔵の再建運動が合体してまちおこし運動となっています。

まず、若き日の島崎藤村が、明治26年に、世嬉の一の前身である「熊文」の社長の長男・熊谷太三郎の英語の家庭教師として滞在しています。

一関に来るきっかけは、藤村の失恋にあったと言われます。

若き日の藤村・島崎春樹は、東京女学院（明治学院大学の前身）の英語教師でした。

その教え子である佐藤輔子（すけこ）に恋をします。

佐藤輔子は才媛だったようで、卒業時には代表で答辞を読んでいます。その答辞が残っていますが、流麗な筆文字で、その才媛ぶりが忍ばれます。

藤村は恋心を抱きますが、輔子には既に親同士の決めた許嫁があって、藤村は失恋してしまいます。

後には色々と女性問題を起こす藤村ですが、その頃は純情だったのでしょう、失恋の痛みからか学校を辞職し、関西放浪の旅に出たり鎌倉のお寺に籠もったりしていました。

そのような折に、キリスト教の普及で一関に来ていた親友の北村透谷のすすめで一関にやってくるのです。

一関に来るときの様子を藤村は小説「春」で次のように著しています。

なお「春」は、理想の春、芸術の春、人生の春をめざし、傷つく藤村の心情を現わして居るとのことです。小説では名前や地名を換えて記しています。

「青木（注・北村透谷）が想像していたとおり、果たして岸本（注・藤村）は困っていた。早速青木は東北行の土産話を始めた。

八戸（注・一関）に大きな造り酒屋がある。そこの若主人というはなかなか話せる男だ。蔵書も沢山ある。一つ行ってみる気はないか。酒屋の居候も面白かろう。そう岸本に勧めたのである。

早く遠いところへ行け－そういう声が岸本の耳の底にあった。遠く離れて、許嫁のある人を忘れたいと思う程、彼の胸は堪えがたくなったのである。そこで八戸行きを急いだ。」

さらに一関に着いた時の様子を童話「眼鏡」に著わしています。

「漸く一の関に着きました。旦那（注・藤村）が酒屋へ訪ねて行きましたら、丁度若主人はお風呂に入っていた時でした。遠いところへ好く来て呉れたと言って、若主人は大層喜びました。

其の若主人に案内されて、旦那は土蔵の内へ入って見ました。そこには若主人の集めた様々なめずらしい本が本箱に入れて並べてありました。

『酒蔵の方へ案内しよう』という若主人に随いていきますと、天井の高い蔵の内には見上げるほどの大きな樽が幾つも幾つも並んで居ました。」

（佐藤輔子と一関）

実は一関は、佐藤輔子ともゆかりがあったのです。

輔子はその幼い頃に、父・佐藤昌造が一関で磐井郡長（注・明治期に一関は、磐井群の外、水沢県になったり一関郡になったりした）として赴任しており、輔子は一関の小学校に通っていたのでした。

藤村は、そのことを知ってか知らずに来関したのか、興味あるところです。

（文豪への跳躍の地・一関）

藤村が一関に滞在したのは、わずか半月ほどでしたが、よほど心に残ったのでしょう、前述のように、その時の様子や心境を童話「眼鏡」、小説「春」、小説「桜の実の熟する時」にも著わしています。

また、一関を離れた後、仙台の東北学院に就職していますが、その時に著わした詩集「若菜集」が認められて文豪への道を駆け上がって行きました。

「若菜集」は自費出版されましたが、その費用として熊谷太三郎からお金を借りての出版だったとのことです。

「若菜集」や「春」など、藤村にとって一関は大きな影響を与えたところだったと言えます。だとすれば一関は、藤村が文豪に羽ばたくためのスプリングボードの地だと言うことが出来ます。

なお、その借用証書が現在でも残っており、そのコピーが文学の蔵に展示されています。

借用証書が残っているということは…。

（さらに蛇足・藤村と輔子の恋）

藤村と輔子の恋愛について、従来は相思相愛だったと言うのが通説でした。

文学愛好者の監修で作られた「島崎藤村と一関」のパンフレットには、次のように掲載されています。

「輔子には親の定めた婚約者鹿討豊太郎がおり藤村との板挟みに苦しんだ。明治27年４月、鹿討豊太郎とともに札幌に住んだが、翌年８月24歳で病死している」

また次のようなエピソードがまことしやかに語られてもいます。

「輔子が卒業するときに、藤村に一通の手紙を残しました。それには『この身は許嫁の元に、我が心は師のもとに』とありました」と言うものです。

「嫌な女ね…」と感想を漏らした女性作家もいましたが、確かに心が他の男の元にあるのでは、許嫁が可愛そうに思えます。

しかし、地元の作家で「文学の蔵」の二代目の会長だった及川和男氏が、この二人の関係は恋愛関係ではなく、藤村の一方的な恋慕、つまり片思いだったと述べています。

及川和男氏は、著書「佐藤輔子の日記」を発表していますが、資料として残されていた輔子の日記を詳細に調査したところ、藤村のことにふれた記述が数カ所あるそうです。

しかしその記述は、藤村を恋愛の対象としてではなく、尊敬する先生としての記述だけであるということです。

写真５　佐藤輔子の写真

多分、藤村フアンの誰かが、藤村が片思いでは可愛そうだと作り上げた話が定説化したのでしょう。

しかし「嘘も100回言うと本当になる」の言葉のとおり、次第に実際にあったこととして伝わり、パンフレットにも掲載される迄になったのでしょう。

いろいろな事象について、歴史的な時日として伝わる誤謬は多々あるようです。

一関の名物と言われる「時の太鼓」にも、似たようなエピソードがありますが、そのうちにどこかの大統領が言っていることも、歴史的事実になってしまうかも知れませんね。

さらに付け加えますと、世嬉の一の博物館の敷地内にある神社は、「初恋神社」のニックネームがあって、恋愛成就に御利益があるとされています。

実際に、この神社のお参りが縁で結婚に至ったとの話が寄せられています。藤村が片思いだったから、神様はお参りの人々には願いがかなうようにしたのでしょうか。

写真６　「島崎藤村と一関」パンフの写真

（井上ひさしさんと一関）

井上ひさしさんは、昭和24年に当社の蔵の一つに滞在しています。

当時、一関で行われていた大きな堤防工事に携わっていた井上組として、一家を挙げて故郷の山形県からやってきたのです。

井上さん一家は、元々は土建業ではなく薬局でした。お父さんは、井上さんが５歳の時に病没して、お母さんが経営していました。

お母さんは商才があったようで、経営は順調だったそうです。やがて旅の浪曲士と一緒に暮らしますが、この男が店の店員の女性と仲良くなり、あろうことか貯めていたお金を盗んで駆け落ちをしてしまいます。

その男が一関にいるということを突き止めたお母さんは、男が土建業として一関の堤防工事に携わって居たところに乗り込み、男を追い出してその土建業を引き継いでしまったというのですから、すごい肝っ玉母さんです。

この経緯は、お母さんである井上マス著「人生はガタゴト列車に乗って」に、縷々記されています。

写真７　味噌蔵の写真

こうして約10ヶ月位過ぎた頃、中心となって働いていたお兄さんが結核を発症し一関の国立療養所（現・国立岩手病院）に入院してしまいます。

井上組は解散し、お母さんは市内の飲食店で住み込みの店員として働きに行きます。子供達は連れて行けないというので、カトリック教会の神父さんのお世話で、井上さんと弟さんは、仙台の教会施設ラサールに預けられます。

井上さんは、やがて仙台一高、上智大学へと進み、釜石保健所の職員などを経て、有名人になって行きました。

（井上ひさしさんと文学の蔵）

井上ひさしさんが文学の蔵と関わりを持つようになったのは、平成３年からでした。

その年は芭蕉の奥の細道300周年にあたります。一関市では、記念の講演会の講師に井上さんを招こうと企画しました。

その機会に、文学の蔵では井上さんに色川武大さんの遺品の保存活動に支援をお願いすることとしました。

色川武大氏は（別名・阿佐田哲也）は、『麻雀放浪記』などで有名です。ジャズ喫茶ベーシーのマスター菅原氏のお世話で一関に移住したのですが、移住後１か月ほどで急逝しました。

その遺品、レコードやビデオテープ、映画フイルムなどを一関市に寄贈してもらい顕彰しようとしていたのです。

ところが東京のファンの人などから、レコードは引き受けたい、ビデオがほしいなどと、遺品の引っ張りっこ状態になっていたのです。

井上さんは、「作家は亡くなれば忘れ去られていくものですが、皆さんのように顕彰して行こうと言うのは、大変ありがたいことです。東京で埋没してしまうより、一関に置いた方が役に立ちます」と、全面的に支援を約束してくれました。そして未亡人を説得して下さり、遺品一式は、一関市に寄贈されました。一関市議会では、そのお礼の予算を可決しました。

この事をきっかけに、井上さんは文学の蔵の活動に共鳴して下さり、ご自分から会員になることを申し出て下さいました。

それで特別会員の制度を作り、その第１号に就任していただいたのです。

写真８　井上さんの講演写真

（蔵の歴史）

博物館となっている土蔵（元は「大蔵・おおくら」と呼ばれていました）は、1918年（大正７年）に、初代社長・佐藤徳蔵が建設したものです。

当時は約3,000坪（約10,000㎡）の敷地に14棟の蔵や作業場と離れ座敷を備えた酒造場でした。江戸時代から続いていた「熊文」を、徳蔵が引き継ぎましたが、その際に蔵を大規模に建て替えたものです。

蔵群は、土蔵だけでなく石の蔵や煉瓦蔵など和洋折衷の建物群が、中庭を中心に酒の製造工程順に、それぞれの役割をなして取り囲む配置でした。

全体の設計者は、遠縁に当たる小原友輔です。東京駅の設計で有名な設計者・辰野金吾の直弟子の一人です。

酒蔵は１万石（18,000kℓ）を生産出来る規模で、最盛期は3,500石（6,300kℓ）を造り、岩手県では「北の浜藤、南の横屋」と言われる大きな酒屋でした。

注・浜藤は旧・岩手川、横屋は当社の屋号

（合併による酒の休造）

太平洋戦争中の昭和19年、戦況は困難を極め、国内の物資不足や米の逼迫なども有り、国策により企業統合が図られます。酒造業界でも、ほぼ強制的に合併統合が行われます。

一関地方では、酒蔵14軒が合併して両磐酒造となり、初代の社長には徳蔵の弟で「玉の春」の社長・佐藤秀平が就任します。

世嬉の一の蔵は、国の被服省の倉庫として借り上げられます。専務であった二代目社長の佐藤正は、軍属として管理に当たりました。

戦後は、占領軍であるアメリカ軍の倉庫として接収されますが、これは短期間で終わりました。

ほっとしたのもつかの間、一関は大災害に見舞われました。

（カザリン台風、アイオン台風による水害）

昭和22年９月、カザリン台風による大雨が水害をもたらし、一関の市街地の大半が人の背丈を超えて水没しました。

この水害は、北上川の狭窄部に流れる水量を超える増水のため逆流したことによるものでした。盛岡市の北の岩手町に源を発する北上川は、岩手県の中央部をほぼ真直ぐに南下し、一関の北で南東に向きを変え、北上高地を横切って宮城へと流れます。

北上高地が狭窄部となっているため、逆流した水は市街地にあふれ出したのでした。

その被害の傷跡も癒えない翌昭和23年９月に、一関はふたたび大水害に見舞われます。

アイオン台風による大雨のためでした。

今度は、北上川の逆流でなくその支流で市の中心部を流れる磐井川の氾濫でした。しかも上流で崖崩れが起き、そこにたまった水や流木などが一気に市街地を襲ったのです。

そのため川の両側の区域、花川戸や川街（かわこうじ）は家屋のほとんどが流失してしまいます。

世嬉の一でも、川側の石倉は壁を突き破った流木が蔵いっぱいに折り重なっていました。

当時は薪で炊飯や風呂を沸かしましたが、この流木は10年近く燃料として利用するほどの量でした。

昭和24年から川幅を三倍に拡げ、堤防も高々とする工事が始まります。

世嬉の一の蔵は、何棟かを飯場として

貸し出されました。井上ひさしさん一家が堤防工事に携わるのはこの時からです。

井上組は、井上ひさしさんのお兄さんが中心となって堤防工事に携わっていました。工事の元請けは大林組でしたが、井上組はその下請けか孫請けだったようです。

中学生だった井上さんも、時には手伝いをしたと語っておられました。

また当時は映画が娯楽の最先端でしたから、大変人気があり、一関には６館の映画館がありました。当社の蔵の一棟は、映画館にも貸していました。井上さんはその映画館で切符切りのアルバイトをしながら、よく映画を見ていたそうです。

（酒造りの再開）

昭和32年、蔵での酒造りの再開を目指して合併した両磐酒造から分離独立を果たします。

戦前よりは小さく500石（90kℓ）のスタートでした。

しかし、営業力が弱いこともあり業績は低迷を続けます。

昭和30年代ではまだ品薄傾向でしたから、三増酒（純米酒を醸造用アルコールや添加物で増量した酒）が主流でした。

その中、商盛挽回を目指して純米酒を売り出し、「これが本当の日本酒だ」と宣伝しました。

しかし、値段が高いこともあり、中々世間には受け入れられず、大勢の挽回にはなりませんでした。

この連続赤字状態は、昭和61年の蔵の再開発事業後の単年度黒字化まで続きます。その間経営を支えたのは、二代目社長佐藤正の始めた自動車学校でした。

（共同醸造と蔵の遊休施設化）

昭和56年９月、二代目社長が脳溢血のため急逝します。翌昭和57年には、岩手県酒造組合の斡旋により、共同醸造に踏み切り、蔵は遊休施設となってしまいます。

共同醸造に切り替えたのは、大きな蔵で少量生産だったためコスト高になっていたこと、醸造のための井戸水が都市化の進展によって水質が劣化してきたことによります。

コストで言えば、１升（1.8ℓ）当りの岩手県平均が370円に対し、当社のそれは500円になっていました。

水質については、現在は勝れた浄水装置がありますが、昭和50年代では、当社が入手出来る範囲の十分な浄水器がありませんでした。

（大型店やホテルへの転換のお誘い）

昭和50年代の終わりから昭和60年にかけて世嬉の一には、大型店やホテルへの賃貸の話が持ち込まれました。

当時は、大型店が市街地の中心部に進出していたことや一関市には駅前にサンルートがあるぐらいで都市型のホテルが無い時代でした。

当社の敷地は約2,000坪（6,600㎡）ほどあり、蔵も遊休施設でしたから、丁度手頃だったのでしょう。

ホテルは全国チェーンだったようですが、地代が坪（3.3㎡）あたり年間１万円で、加えて当社の酒を全量一括買い上げても良いとの条件でした。

当社は磐井川の側にありますから、「リバーサイドホテル」なんてすてきでしょう？　とも提案されたりしています。大型店も同じような条件です。

経済的には大変魅力的なお話ではありましたが、結局お断りします。お話を受けると、全ての蔵を取り壊わさなければならないからです。

昭和59年に、そうした再開発の前例を見たこともお断りの一因でもありました。

当時、家内の静養のため毎年秋田県の玉川温泉に行っており、その時に鹿角市を訪れていました。そこに江戸時代から続く造り酒屋さんがあって、とても雰囲気のあるたたずまいでした。

千本格子に金の縁取りの大きな看板、広い三和土と時代劇さながらの帳場格子のお店に品良いお年寄りのご婦人が座っておられるのは、一幅の絵画を見るようでした。映画寅さんのロケにも使われたそうです。

その酒屋さんが、ある年に大型家電店になってしまっていました。アスファルトの駐車場、安普請（所有者には失礼な表現ですがお許しください）の大きな店舗を見たときの衝撃、喪失感は忘れることが出来ません。

大型店やホテルの話をお断りすることについては、友人から「こんな良い話は断らない方が良い」との忠告もありましたし、後に聞いた話では、「蔵なんか残していい道楽だこと」とか、「馬鹿なことばかりしているから、世嬉の一は儲からないのさ」などと噂されてもいたようです。

それからしばらくは、相変わらず赤字続きのままでしたから、「断ったのは失敗だったかなあ」と悩むこともしばしばでした。

ところがそれから４年後、「断って良かった」と痛感することになります。

朝、新聞を拡げると岩手日報のトップに五段抜きで、｛イトーヨーカドー北上市撤退｝の記事が掲載されていたのです。

つまり、当社に話があった４年後には、大型店が市街中心部から郊外への流れが生まれていたのです。一関市内では、中心商店街のダイエーや駅前のデパートが閉店、撤退して土地の所有者の方々が、後始末に苦労なさったと聞いています。

（酒蔵群・登録文化財への登録）

六棟の酒蔵群は、平成11年に国の登録文化財に登録されました。この事は、蔵を残して良かったのだと国が認めて呉れたように感じて、感無量でした。

この登録に際しては、一関市博物館の学芸員（当時）だった工藤氏の提案と支援のお陰がありました。

以上の経緯から、よく「世嬉の一さんは先見の明があるね」と言われます。

ですが、これは結果として良い方向に向かったと言うことであって、その時々に明確に見通しての結果ではありません。

ただ、経済的なメリットがあるからと言って、古き良き物を簡単に取り壊すのには抵抗があったと言うことです。

後に専門の先生方に教わり、色々と知ることがあったのですが、当社の蔵は単に大きいとか和洋折衷だけでは無いというのです。当時の技術を駆使し、それなりの投資をして出来上がって居ると指摘されました。

例えば、元の店と事務所の床は、コンクリートの研ぎ出しですが、白い点々がちりばめられています。大理石の小片を塗り込めています。壁の腰の部分のタイルは、イタリー製だそうですが、現代感覚でもおしゃれな感じです。

入り口の上部のライオンの頭部を形作った飾りは、左官職人がコテ一つで作り上げています。外壁は上部は漆喰ですが、腰下部分は石造りのようにコンクリートで作られています。指摘されるまで、石だとばかり思って居ました。

従来は、その当時お金があるから作ったのだと思っていましたが、建築の先生方は、「それだけの技術者を集めたり、高価な資材の使用を認めるのは、施主にもそれらへの理解があったから」と指摘されました。

こうした建物の勝れたことを、明確に把握していたわけではありませんが、幼い頃からなじんで来たので何となく良さを感じていたのです。

この事は、町作りでも参考になるとおもいます。すなわち、良質な景観の中で育った人々は勝れた建物など景観を大切にする感覚を育てていると思うのです。

古い建物などは、単に古いから保存価値があるのではなく、芸術的に勝れてい

たり、時代の技術や知恵の込められたものが大切なのです。ヨーロッパの古い町並みなどに、訪れた人々が共感するのも、そうした技術や知恵の賜物だと思われます。

時の流れに埋没しない価値を（理屈で説明できなくても）、貴重に感ずる感覚を育てることが良質な町作りのために大切なことと思います。子孫に良質な街を伝えるために、行政には特にそれを求めたいと思っています。

（蔵と東日本大震災）

蔵は、前述の大水害の外、度々地震の被害も受けています。

宮城沖地震が度々起きていますが、2003年（平成15年）の際は、蔵の破風部分が崩落しました。

しかしなんと言っても東日本大震災が最大の被害でした。

この災害では、大津波の被害から沿岸地域がクローズアップされますが、一関でも被害は大きく、全壊家屋は60数戸に上ります。

世嬉の一でも、博物館をはじめ全ての蔵が大きな被害を受けました。

博物館は、地震の時は、蔵全体がまるで稲穂のように波打って、今にも倒壊するのかと危ぶまれるほどでした。幸いに倒壊もせずに済みましたが、四面の外壁に亀裂が入り、内壁が所々で崩落し、床下の地盤が沈下したためコンクリートの床との間に15㌢ほどの空間が広がりました。

また角の柱と土台も被害を受け、取り替えなければ連鎖的に壁の崩壊が起きる状態となりました。

石蔵は、南面の壁面全体が一枚の板のように両角から離れてばたばたと揺れていました。

幸い崩壊は免れましたが、その面と他の二面に多くの亀裂が入り、内部に日の光が通る状況でした。

もう一棟の道路に面して建っている南の石蔵は南側の石壁の一部が崩れ落ち、隣家を直撃してしまいました。幸い空き屋だったので人的被害は無かったのがほっとしたことです。

直売所にしている旧製品倉庫の土蔵は、全体が中庭側に傾き、軒部分の漆喰壁が10㍍ほど崩落してしまいました。

平成８年から始めたクラフトビールの工場内部でも、醸造タンク貯酒タンクが動き回りもたれ掛かったりの有様です。

「これだけの被害は、当社の力では復旧させるのは無理だ、蔵はあきらめなければならないか」と呆然としていたのが事実でした。

そんな状況の目（震災３日目と記憶します）に、大船渡市の株式会社明和土木の営業・山浦氏が震災見舞いに来社しました。

明和土木さんは、お世話になった方に紹介されて、それまで蔵の修理や小規模な改築を請け負ってもらっていたのです。

山浦さんは、石蔵を見て「石がずれていないから大丈夫です。割れ目から水が入ると壊れていくから、すぐ補修しましょう」との提案をします。

工事費に幾らかかるかと気がかりで渋っていると、「お金なんか後でいいのだから」と、五日後には足場を組んで石蔵の補修にかかりました。

その工事が、会社全体を前に進める一つのエネルギーになったと思います。建物だけで無く商品や在庫の酒なども被害を受け、もちろん注文もなく、後片付けの日々で、口にこそ出しませんが社員の皆も会社の先行きに大きな不安を抱えていたのです。

その状況での蔵の補修工事は、会社が前に進むぞと言う無言のメッセージになったのです。

その後国のグループ補助金の認定を受けるることが出来て、蔵群は生き還りました。

（小さな支援が大きな力づけになる）

余談になりますが、震災から会社を前向きにしたもう一つの力があります。

それはお客さまや縁ある方々の支援です。

震災直後に、現四代目社長の得意先の飲食店さんからオーダーが入ります。

出荷が出来ないとお断りしようとすると「そんな事は判っています。出荷できるようになったら送って下さい。代金は先に振り込みます」というのでした。現社長が、当時担当の関東の飲食店さんからでした。

また「武蔵大学の○期生です」と付言しての注文が頻繁に入るようになります。

後で判りましたが、武蔵大学の同窓会がホームページで、OBの会社が被害に遭ったから皆で支援しようと呼びかけてくれたのでした。

小さな大学でしたが、それ故の良さだなあと改めて見直したことです。

それらの注文の一つ一つは何百万、何千万というものではありません。しかし、たとえ１本のお酒の注文でも、寄り添って呉れている方がいるのだという実感は、大きな希望になって行くのです。

それまで暗い顔で後片付けに携わっていた社員の皆の顔色も明るくなって行ったのでした。

この経験から、四代目の現社長・佐藤航は、「恩送りプロジェクト」を行っています。

東日本大震災の時には、指定のクラフトビールを購入して下さったお客さまに、沿岸の被災会社の商品を送るのです。

能登地震では、お酒やクラフトビールを買い上げて頂いた売上げの全てを、能登の酒造会社・11社に寄贈させて頂きました。

決して大きな金額ではありませんが、たとえ小さな支援でも大きな力づけを頂いた経験によるものです。

（耐震工事と醸造の再開）

蔵の再生は出来ましたが、震災への不安は依然として存在します。

特に南の石蔵は、隣家の外道路にも面しているので、前回のような崩落が起きると、どれほど大きな被害が出るかも知れません。

専門家の指導を受けて、大規模な耐震補強を行いました。石蔵の内側の周囲に鉢巻きのように太い鉄骨を回し壁面を固定します。その鉄骨を支える太い鉄骨の柱を一定間隔で建て、床下に支えを伸ばしてコンクリートで固めるのです。

こうして一応安心となった石蔵に、2024年（令和５年）、酒の醸造工場が再建されました。この場所での酒造りを止めてから42年ぶりのことです。

製造数量は少ないですが、クラフトビールの醸造設備の知恵も活かし、小回りのきく設計となっています。

社長が自ら杜氏の資格に挑戦し、社長兼杜氏として頑張っています。銘柄は世嬉の一の屋号である『横屋』と名付けました。

早速イタリアでのコンクールでプラチナ賞を受賞するなど、実績を挙げ、地元の好評もえています。

（受け継いだ者の責務）

以上のように、博物館をはじめとする蔵群はいろいろな変遷を経て現在に至っています。

それぞれの蔵一つ一つが大きい上に、建設以来100年を過ぎ、度々の災害にも遭って来ました。

毎年なにかしらの修理を行わなければならず、社長からは「蔵の修理のために稼いでいるようなものだ」とぼやきも出ます。

ぼやきながらも、蔵を出来るだけ活用しよう、少しでも良い状態にしようと努力しているのは、この蔵群の良さを理解しているからでしょう。

新しい勝れた物は、センスが有りお金のある方なら、どなたでも可能です。

しかし、経済的なメリットが無くても、古き良き物を活用し残して行こうとするのは、それを受け継ぎ、愛着を持っているからこそ出来ることです。まして世嬉の一の蔵群のように、一定の大きさをもって景観を形作っている建物は、法的な所有は当社ですが、景観や町並みの観点からは、地域の共有物と言うべき物です。

平家物語のように、形ある物はいずれは消えゆきます。どれほど立派な物でもいずれは寿命がきます。

しかし、仮に経済的なデメリットがあっても、その天寿が来るまで、出来るだけ良好な状態で次の時代に伝えるのは、縁あって受け継ぎ、それらになじみ、それらに愛着を持っているからこそ可能であると思うのです。

そのような思いを込めて、世嬉の一の蔵群はこれからも、変化を遂げつつ、伝えられて行くでしょう。

民俗文化博物館内部　1

民俗文化博物館内部　2